

【特別対談】慶應義塾大学・渡辺光博先生と描く遠藤エリアの未来像

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



慶應義塾大学藤沢湘南キャンパス（SFC）政策・メディア研究科教授 渡辺光博先生と、湘南慶育病院にて対談を行いました。同院は、研究機関を備えた国内唯一の民間病院です。施設内にはラボを設置。基礎研究から臨床研究まで、慶應義塾大学の学生さんや医師たちが日々研究に励んでいます。設立にあたってお世話になった渡辺先生と、湘南慶育病院のある「遠藤エリア」についての構想を語り合いました。

論理的思考を習得できる「研究」の場— 理想を具現化して誕生した湘南慶育病院



渡辺：先日、ラボでの研究が『Cell（セル）※』に掲載されました。『Nature』『Science』とともに三大科学誌となる偉大な雑誌です。

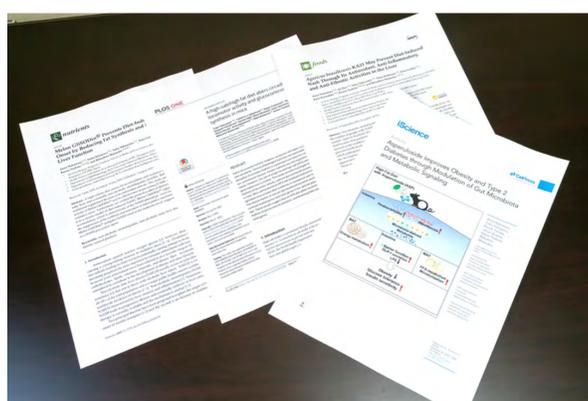
竹川：民間病院の研究室から、世界的な雑誌に研究が出せるのは非常に名誉なこと。希少な例でしょう。

渡辺：その通りです。民間病院で研究室を備え、臨床と研究どちらもできる場所は他にはありません。コストもかかる中、このような設備が実現できたのは竹川先生の理解があってこそです。私が先生に初めてお会いしたのは、先生が慶應義塾大学病院にいらしたとき。「臨床と病院が近くにあり、お互いに作用し合う理想の場所を作りたい」とお話されていました。

竹川：基本的な病院機能を持つ施設であることに加え“大学とコラボレーションすること”が湘南慶育病院設立の趣旨です。それでこそ存在意義があります。その一つとして私が重要と考えるのが研究。大学の先生との連携が一層深まるとの考えから病院の中に研究部門を作りました。

看護・リハビリテーション研究会を実施するなど、健育会は民間病院としても非常に研究に重きを置いている組織です。その原点にあるのは、私の大学病院での経験です。病院で患者さんを診ながら同時に研究の指導を受け、研究が「いかに論理的な思考につながるか」を体感しました。

職種に問わず、医療従事者は科学的・論理的思考を持ち、常に「現状よりいいことが患者さんにできるのではないか」と疑問をもって接することが大切です。私の根底にある病院経営理念を具体化しようとした試みの一環ですね。



※ライフサイエンス分野における世界最高峰とされる学術誌

対「個」はパターンではまかなえない 我々が研究を続ける意義とは…



渡辺：以前、私は学生やお医者さんたちの指導にあたっていました。そこでは専門分野に片寄っていました。臨床だけの学びが悪いとは言いませんが、それではAI（人工知能）に負けてしまう。例えば、血糖値の数値から薬を判断するだけでは十分ではありません。

医師が研究する意味は“考え方”。病気の裏にある病気を見つけ出し、一人ひとりに対処できる思考力が必要です。その際、データを見て考える研究は非常にいい判断材料になります。竹川先生が目指す“本当のプロフェッショナル”を生み出していきたいと考えています。

竹川：おっしゃるとおりですね。ともすれば、病院では患者さんを診る、介護施設では介護するという臨床がパターンリズムになってしまいます。しかし、私たちが接しているのは人間です。同じ病気、同じ年齢であっても、個々が持ちあわせる要素はそれぞれ違うはずですから、パターンの繰り返しでは十分とは言えません。「果たしてこれでいいのか」「患者さん、利用者に寄り添う対応策があるのではないかと、違った角度から考えることが必要。毎日患者さんを診ているだけではつい忘れがちですから、研究によって脳を働せることに意味があるのです。



臨床と同時に研究もできる
学会トップも羨む、充実した唯一無二の施設



渡辺：ラボでは研究者だけでなく、湘南慶育病院で働いている医師も診察が終わったあとや休日に研究をしています。

竹川：それが目的です。湘南慶育病院には常勤の医師のほかに、慶應義塾大学の教授・准教授・特任教授の方が何人もいらっしゃいます。

渡辺：先日、学会があった際に、湘南慶育病院とラボのツアーを行いました。日本を代表する学会のトップの先生たちが驚き「ここに引っ越してきたい」と漏らすほどです。医師として働きながら、研究も続けられる場所、民間病院でありながらもこれほど広いスペースを使える場は他には存在しません。



竹川：それは初耳でしたが、非常に喜ばしいことです。意欲のある医師にはどんどん来ていただきたい。実際に、この4月から常勤として就任した慶應義塾大学の医師が「研究ができる」との理由から派遣されてこられました。

渡辺：竹川先生の「後輩のために勉強をしてもらいたい」という強い思いを感じています。いまこうして私たちが研究できる環境——学生とともに、ご厚意に応えるべく成果を出そうと励んでいます。



医療・大学・地域が一体化した
健康長寿社会のモデルケースとして世界に発信したい



渡辺：ラボでは基礎から臨床までの研究を行っています。私の夢は、その流れを作ることです。基礎的に詰めた本当にいいものだけを臨床研究に乗せ、その結果を世に出して貢献していきたいです。

さらに、ここ遠藤エリアを「健康長寿社会」のモデル地区として、世界に発信したいと考えています。遠藤は自然が豊か。病院の奥にも広大な土地がいっぱいあります。遊歩道のある「健康の森」を整備しているところです。実際に、畑のある古民家を残し、湘南慶育病院の臨床の先生が患者さんとともに農作業をしています。自分で植えたトマトの成長を見たり、土間でおしゃべりをしたり…みなさん本当に楽しそうに過ごしているのです。健育会にはデイケア施設もありますので、システムが構築できればそのような利用者さんにも活用していただきたいと思っています。



3年前に始めた「健育祭」も、初回は700人程度でしたが、2回目は2000人、今年はオンラインを使いながら1万人に近づきました。今年はコロナウイルスの関係で現場開催できなかったことは残念ですが、湘南慶育病院を日本中、世界中に知らせる機会にもなったはずです。

竹川先生には、研究だけではなく街まで幅広く見ていただき、毎年“病院”と“大学”、“地域”の一体化に向けた取り組みの夢は、少しずつ叶っています。湘南慶育病院を中核にして、これから日本が抱える「健康長寿社会」の実証実験をしながら、モデルケースになりたいと考えています。



渡辺先生の遠藤エリアモデルケース構想は『KEIO SFC REVIEW』でも取り上げられた

膨大なデータをもとに「湘南慶育病院発」の研究を



竹川：膨大な基礎・臨床研究がある中、課題もあります。データを解析して仮説を立証すること。

湘南慶育病院には常に230人の入院患者さんがいて、4年経った現在は膨大なデータが蓄積されています。その中でうまくいった/いかなかったケースに注目して統計的な解析をしていただきたい。学生さんにも病院のデータを活用し、臨床研究してほしいと思います。

渡辺：おかげさまで、近年は博士課程を取る学生も増えています。中には、公衆衛生分野において厚生省の治療指針に携わるほどの実力があり、専門としてアメリカに留学経験を持つ学生さんも在籍しています。実は、アメリカ留学中に、帰国後このラボで基礎研究を学びたいと相談を受けていました。博士を持っていても研究生であれば給料はありませんし、改めて研究室に入るメリットがあるかはわかりません。そのことを伝えたところ、「アメリカでは基礎も統計学も、どちらも理解している。一方、日本では統計解析ばかりで基礎ができていない人が多いように感じるが、それでは未来はない」と。改めて基礎・臨床をまんべんなく学ぶことの重要性、このラボの存在意義を感じました。

竹川：データはいくらでも提供します。健育会では「ミラクル賞」として医学の常識を超えて改善した例を評価しています。何百例もある中で、うまくいった例とそうでなかったものを比較分析するなど、研究の題材はたくさんあります。今後もより「湘南慶育病院発」の研究が出てくることを願います。

